

ISSN 1344—8366

『古代アメリカ』 *América Antigua*

第 22 号, 2019 年, 抜刷 (pp.145-162)

<調査研究速報>

高校世界史における古代アメリカ文明の学びの検討

多々良穰 (東北学院榴ヶ岡高等学校)

Consideration of learning the ancient American civilization
in classes of World History at high school

Yutaka Tatara (Tohoku Gakuin Tsutsujigaoka High School)

古代アメリカ学会

Sociedad Japonesa de Estudios sobre la América Antigua
Japan Society for Studies of Ancient America

『古代アメリカ』22, 2019, pp.145-162

<調査研究速報>

高校世界史における古代アメリカ文明の学びの検討

多々良 穰

(東北学院榴ヶ岡高等学校)

1. はじめに

古代アメリカ学会では、高校生が古代アメリカ文明の正確な知識を身に付けるため、2008年に「学術情報の普及に関わる戦略ワーキンググループ（以下戦略WG）」、翌2009年に「学術情報の普及に関わる戦略検討班（以下戦略検討班）」を設置した。そして高校世界史教科書の記述内容について検討し、教科書会社9社に問題箇所と修正案を送付した〔青山他 2010〕。さらに2016年には、古代アメリカ文明の研究成果をどのように社会還元するかを検討する「高校教育検討ワーキンググループ（以下教育WG）」が立ち上げられた〔渡部他 2018〕。しかし、高校生が古代アメリカ文明を題材に深く学ぶためには、教科書の記述を正確にするだけでは不十分であり〔多々良 2017〕、2022年から実施される平成30年3月告示の高等学校学習指導要領（以下新学習指導要領）を見据えて、高校生が何をどのように学ぶべきかを真剣に準備する必要がある。

現行の高等学校学習指導要領（以下現学習指導要領）では「世界史B」の目標が「文化の多様性・複合性と現代世界の特徴を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」とある〔文部科学省 2009:35〕。だが、新学習指導要領では、新科目「世界史探究」の目標に多くの文言が追加された。「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ」、「時期や年代、推移、比較、相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して」、「歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」ことや、「他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める」ことなどである〔文部科学省 2018a: 69-70〕。つまり「諸地域の歴史的性質の形成、諸地域の交流・再編、諸地域の結合・変容という構成に沿って、世界の歴史の大きな枠組みと展開について理解を深め、地球世界の課題とその展望を探究する力を養うことをねらいとして設置された」のである〔文部科学省 2018b: 265〕。

本論の目的は、今後の「世界史探究」の授業を見据えて^(註1)、古代アメリカ文明を通じて高校生が深く学ぶことができる授業を提唱することである。そのために、教科書の記述問題だけでなく、これまで焦点をあててこなかった教員用指導書の問題点を指摘し、指導書の役割とあり方を考える。そして従来の「知識偏重型」や「知識伝達式」の授業ではなく、「問い」を設定して高校生に考えさせる筆者の授業実践を報告し、その成果を検証して今後の世界史授業のあるべき姿を考察する。

2. 問題の所在

これまで古代アメリカ学会が追究してきた高校教育における問題は、古代アメリカ文明に関する教科書記述が不正確であることと、教員が十分な知識を持っていないことであった。そこでまず、これまでの教科書記述がどのように修正されてきたのかを、教科書の記述内容を検討した最新の報告〔青山他 2013〕や戦略検討班の検討に基づいた修正案〔渡部他 2018〕をもとに整理し、今後どのような観点から教科書を記述すべきかを述べる。2022 年度から使用する「世界史探究」の教科書は、今年 2019 年度から徐々に執筆準備が始まるため、これまでの修正案が非常に参考になるからである。

次に、新学習指導要領に見られる問題点も指摘する。まず、古代アメリカ文明を軽視している点があげられる。内容・大項目 B（諸地域の歴史的特質の形成）・中項目(2)（古代文明の歴史的特質）・アには「オリエント文明、インダス文明、中華文明などを基に、古代文明の歴史的特質を理解すること」が身に付ける知識だと書かれている〔文部科学省 2018a: 71〕。だが、新学習指導要領解説には「生徒の興味・関心に則して、アフリカ、南北アメリカなどを扱うことも考えられる」と記されており〔文部科学省 2018b: 288〕、物事を多面的・多角的に考える視点を身に付けるためにも、古代アメリカ文明の学習は歴史教育に不可欠である。

また、新学習指導要領の求める授業に関する問題点として、授業における問いの設定の重要性が指摘できる。内容・大項目 B・中項目(1)（諸地域の歴史的特質への問い）や(2)（古代文明の歴史的特質）には、「問いを基に」や「諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連などに着目」するという表現があり〔文部科学省 2018a: 70-71〕、同様の表現が他の項目にも多く見られる。問いを設定する場合、宗教を中心とした考察の重要性も考えなければならない。内容の取扱い・中項目(2)（取扱いに当たっての配慮）・ウには「生活、社会、文化、宗教の多様性に気付くようにすること」が明記されている。そして古代文明の歴史的特質については、「自然環境と人類の活動との相互の関係を地理的視野から触れること」、諸地域の歴史的特質については、「国家や宗教の関係や、文化や宗教が人々の暮らしに与えた影響、異なる宗教の共存に気付くようにすること」も書かれている〔文部科学省 *ibid.* 76〕。自然環境が人間の文化や宗教に与えた影響を考察することが、高校生の学びにとって重要であると言える。

この問いを設定することに一定の役割を果たすのが、授業で教員が利用している教員用指導書（教授資料）である。教員用指導書の検討は、古代アメリカ学会の戦略 WG や戦略検討班では取りあげておらず、現在の教育 WG でも研究対象にしていない。しかし、教員用指導書の内容や授業運用のヒントは、教科書を用いて授業を展開する際に重要であり、その役割と意義について論じる必要がある。現在発行されている教員用指導書は、詳しい用語解説は載せているものの、後述する「多面的・多角的に考察し、歴史に見られる課題を把握し解決する」ような深く考える授業への道しるべにはなっていない。こうした観点から、今後の教員用指導書のあり方について考察する。

最後に、授業を担当する教員の役割を改めて考え、授業の学習方法も改善しなければならない。目標・中項目(2)には「多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」とある〔文部科学省 *ibid.* 70〕。これは文部科学省が目指す「主体的、対話的で深い学び」を実現するために、授業において生徒同士が考察する時間を設けたり、意見を発表したりする機会を作ることの意味する。繰り返し新学習指導要領で述べられている「思考力、判断力、表現力等を身に付ける」ためには、教員が一方通行の講義型授業から脱却し、教室を生徒が課題を追究し、解決する場となるよう努めなければならない。生徒が正確な知識を獲得しながら主体的に物事を考える姿勢を、どうつけさせるかの視点が必要である〔多々良 2018〕。つまり、主体的、対話的で深い学びを実現するよう生徒に働きかけるファシリテーションが教員の役割だと認識することが肝要だろう。

3. 教科書の記述内容

3-1. 教科書の出版状況

教育基本法が2006年に改正され、学校教育法の一部が改正されたことを受け、現学習指導要領が2009年3月に改定された。それ以降、高校世界史教科書を出版してきた会社と冊数は、筆者が確認したところ表1のとおりであった。古代アメリカ学会の戦略WGが教科書修正案を作成し、同学会事務局から教科書会社へ送付したのは2010年8月のことである。この時点で世界史Aは9社12冊、世界史Bは7社11冊の教科書があったが、翌2011年度からは一橋出版が世界史Aから撤退し、8社となった。さらに新課程となった2013年度からは、世界史Aから三省堂と桐原書店が、世界史Bから三省堂・清水書院・第一学習社が撤退し、それぞれ6社9冊、4社4冊となった。また、この年だけ世界史Bの教科書は東京書籍と山川出版社とも1冊のみ発行したが、翌2014年度にはそれぞれ2冊、3冊に戻しており、それ以降は現在と同じ四つの出版社が7種類の教科書を発行し続けている。2019年度に使用されている教科書の占有率は、表2の通りである。2018年度よりは0.7%減ったものの、『詳説世界史 改訂版』（山川出版社）は50.6%と相変わらず半数以上を維持している〔時事通信社2019: 12-13〕。

年度	世界史A	世界史B	備考
2009(平成21)	9社13冊	7社11冊	
2010(平成22)	9社12冊	7社11冊	
2011(平成23)	8社11冊	7社11冊	世界史A：一橋出版が撤退
2012(平成24)	8社11冊	7社11冊	
2013(平成25)	6社9冊	4社4冊	世界史A：三省堂と桐原書店 世界史B：三省堂、清水書院、第一学習社が撤退
2014(平成26)～	6社9冊	4社7冊	世界史B：東京書籍が1冊 山川出版社が2冊を再版

表1 高校世界史の教科書の推移

科目名	出版社	教科書名	占有率
世界史A	帝国書院	明解 世界史A	26.7
	第一学習社	高等学校 改訂版 世界史A	12.9
	東京書籍	世界史A	12.5
	実教出版	世界史A 新訂版	11.9
	実教出版	新版世界史A 新訂版	10.2
	山川出版社	世界の歴史 改訂版	8.2
	山川出版社	要説世界史 改訂版	8.2
	山川出版社	現代の世界史 改訂版	7.2
	清水書院	高等学校 世界史A 新訂版	2.1
科目名	出版社	教科書名	占有率
世界史B	山川出版社	詳説世界史 改訂版	50.6
	東京書籍	新選世界史B	16.8
	帝国書院	新詳 世界史B	8.6
	東京書籍	世界史B	8.4
	山川出版社	高校世界史 改訂版	8.1
	実教出版	世界史B 新訂版	6.5
	山川出版社	新世界史 改訂版	1.0

表2 2019年度 高校世界史の教科書占有率

3-2. 高校世界史教科書の記述

本論では、古代アメリカ文明について詳しく記述している「世界史B」を扱う。本来は占有率の高い教科書を扱うべきだが、『新選世界史B』（東京書籍）と『新詳世界史B』（帝国書院）は古代アメリカ文明の記述が乏しいため、紙面の関係上、古代アメリカ文明を詳しく記述していかつ占有率が高い『詳説世界史』（山川出版社）と『世界史B』（東京書籍）の2冊の教科書を取りあげ、これまでの記述内容の変遷を整理する。なお教科書の対象年度は、『古代アメリカ』で報告された2010年度と2013年度〔青山他 2010, 2013〕、そして現在の2019年度である。

3-2. 1) 『詳説世界史』改訂版（山川出版社）

古代アメリカ学会の教科書修正案に従って、記述が改善された箇所が随所に見られる（表3）。2013年度の教科書以降は一つも改善されず、2019年度の教科書もほぼ同じ記述である。

2010(提言前)	2013(提言後)	2019(現在)
中央アメリカのメキシコ高原や南アメリカのアンデス高地	メソアメリカ(現在のメキシコと中央アメリカ)と南アメリカのアンデス地帯	変更なし
アメリカ大陸の都市文明としては、オルメカ文明が前1000年ころまでにメキシコ湾岸で成立し	アメリカ大陸では、 <u>前1200年頃</u> までにオルメカ文明がメキシコ湾岸で成立し	変更なし
ユカタン半島には、4世紀ころから9世紀にかけてマヤの都市国家が栄え	ユカタン半島には、 <u>前1000年頃から16世紀にかけてマヤ文明が展開して、4世紀から9世紀に繁栄期をむかえ</u>	変更なし
絵文字	マヤ文字	変更なし
前2世紀にテオティワカン文明がうまれた	<u>前1世紀</u> にテオティワカン文明がうまれた	変更なし
国王(インカ)は太陽の化身とされた	修正なし	変更なし
南北アメリカ文明は、金・銀・青銅器はもっていた(青銅器は南アメリカのみ)	南北アメリカ文明は、金・銀・青銅器をもっていた	変更なし
チチェン=イツァ	チチェン=イツァ	写真削除
巨人人面彫刻	巨石人頭像	変更なし
アメリカ大陸への到達	<u>アメリカ大陸の征服</u>	変更なし
スペイン王室は、「征服者」(コンキスタドル)の率いる軍隊をアメリカ大陸におくりこみ	アメリカ大陸には先住民による諸国家が形成されていたが、スペイン王室は、「征服者」(コンキスタドル)の率いる軍隊をアメリカ大陸におくりこみ	変更なし

表3 『詳説世界史』改訂版（山川出版社）の記述変遷（pp.75-76, 202, 204）

『詳説世界史』（山川出版社）の教授資料・授業実践編には、旧版（本稿でいう2010年度版）から改訂した以下の6点が書かれている。「考古学等の研究成果を受けて」と記されているように〔山川出版社 2017: 101〕、古代アメリカ学会における教科書会社への修正案が活かされていることがわかる。

- ①南北アメリカの諸文明については、考古学等の研究成果を受けて、年代推定をはじめとして、従来の記述に変更を加えている。
- ②メソアメリカという用語を加えるなど、南北アメリカの地理的区分を現状により即した正確なものとした（旧版においては、「中央アメリカ」にメキシコを含め、やや厳密ではない広義の用法に従っていた）。

- ③アンデスの高地ではジャガイモが中心に栽培されたため、表記を「アンデス地帯」に改めた。
- ④マヤの文明に関しては、旧版では「4 世紀から 9 世紀」という古典期を示していたが、繁栄した時期全体を示す記述に変更した。
- ⑤アステカ人のメキシコ盆地への南下時期は、旧版では 12 世紀としたが、明確にはわからないため削除した。
- ⑥南北アメリカの古代文明において青銅器は南アメリカに限られるという説が従来から一般的であるが、メソアメリカでの青銅器の存在を完全に否定することは難しく、南北アメリカには鉄器がなかったということ述べるのが本旨の箇所、で、「青銅器は南アメリカのみ」と断定する記述をわざわざ付加的に挿入することに意味はあまりないと考えられる。

3-2. 2) 『世界史 B』（東京書籍）

『詳説世界史』（山川出版社）と同様に、記述が改善された箇所がいくつか見られる（表 4）。「メソアメリカ」という表現が使用されている点、「都市文明」や「都市国家」という用語が使われなくなった点、マヤ文明やテオティワカン文明の年代が修正された点、「絵文字」という用語が使われなくなった点、オルメカの彫刻が「巨石人頭像」に修正された点などがあげられる。だが山川出版社と同様に、2013 年度の教科書からは一つも変更されず、2019 年度の教科書はまったく同じ記述である。

以上のことから、双方の教科書とも 2013 年度以降は現在に至るまで記述はほぼ変えられていない。これは、2010 年に古代アメリカ学会が送付した教科書修正案が大きく影響したことを示唆している。2022 年から始まる「世界史探究」の教科書編集に多くの時間が割かれるため、教科書の記述内容はほぼ現状のままで進むことが予想される。したがって、むしろ現在執筆が始まっている教科書に対し、働きかけることが必要だろう。

4. 教員用指導書（教授資料）の内容と分析

教員用指導書は、教科書会社によって体裁はやや異なるが、教科書の項目ごとに内容が整理しており、板書例を示しているものもある。そして重要な語句の解説がついている。授業において、指導上の留意点やアイデアが書かれているものもある。

上記で扱った 2 冊の教科書とセットとなっている教員用指導書には、どのような点に留意して授業するように記され、教員はどんな知識を得ることができるのだろうか。内容を整理して、古代アメリカ文明を教えるポイントを以下にまとめ、簡単な分析も行いたい。

4-1. 『詳説世界史』（山川出版社）の教員用指導書

山川出版社の教員用指導書には、授業実践編と研究編の 2 冊があり、詳しい用語解説や研究動向は後者に記されている。『授業実践編』は、「板書例」、「導入」、「指導上の留意点」、「改訂のポイント」などで構成されている。「導入」には、以下の二つが示されている [山川出版社 2017a: 101]。

- ①巨石人頭像のベビーフェイスやマチュピチュ遺跡の写真を示し、アメリカの古代文明への関心を高める。
- ②生徒が知っているアメリカ大陸原産の農作物を列挙させ、トウモロコシ・サツマイモ・ジャガイモ・トマトなどが近現代の食文化に多大な影響を与えていることを指摘する。

2010(提言前)	2013(提言後)	2019(現在)
3万年前、ベーリング海峡が陸続きであったところ	1万2千年以上前、ベーリング海峡が陸続きであったところ	変更なし
メキシコ高地とアンデス高地では、前1千年紀のはじめに神殿を中心とした都市建設がはじまり、その後、メキシコ高原、ユカタン半島、アンデス高地に生まれた諸文明は、複数の巨大石造都市をつぎつぎとつくりあげた。	<u>メキシコ湾岸とアンデス地方では、前1千年紀には神殿を中心とした都市が成立しており、その後、メキシコ高原、ユカタン半島、アンデス地方に生まれた諸文明は、複数の巨大石造都市をつぎつぎとつくりあげた。</u>	変更なし
メキシコ高原のインディオたちは、前1500年ごろから夏作雑穀で乾燥に強いトウモロコシを栽培する独自の農耕文化を生み出し	メキシコ高原のインディオたちは、 <u>前2千年紀</u> から夏作雑穀で乾燥に強いトウモロコシを栽培する独自の農耕文化を生み出し	変更なし
前9世紀になると、メキシコ湾岸地域に、泥と石を用い、広場をそなえたピラミッド型神殿が建設された。	<u>前2000年</u> ころになると、メキシコ湾岸地域に、泥と石を用い、広場をそなえたピラミッド型神殿が建設された。	変更なし
特殊な絵文字をもち、聖獣ジャガーや <u>聖鳥ケツツアル</u> を信仰するこの文明はオルメカ文明とよばれ	特殊な絵文字をもち、聖獣ジャガーなどを信仰するこの文明はオルメカ文明とよばれ	変更なし
紀元前後ごろマヤ文明が成立した	<u>前4世紀</u> ごろマヤ文明が成立した	変更なし
マヤ文明では、絵文字で飾られた石造建築	マヤ文明では、 <u>文字</u> で飾られた石造建築	変更なし
マヤ文明は、10世紀にメキシコ高原のトルテカ族の侵入によって滅んだ。	マヤ文明は、10世紀にメキシコ高原の <u>トルテカ人</u> の侵入を受けた。	変更なし
トルテカ族やチチメカ族	トルテカ人やチチメカ人	変更なし
12世紀ごろこの地に移住してきた狩猟民のアステカ族は、諸都市を服属させてゆき、14世紀には現在のメキシコシティの地に首都テノチティランをつくり、王国を建てた。この王国は16世紀初頭には、メキシコ湾岸から太平洋岸までを支配下におさめるアステカ帝国に発展した。	12世紀ごろこの地に移住してきた <u>アステカ人</u> は、14世紀には <u>現在のメキシコ市の地に首都テノチティランをつくり、諸都市を服属させて王国を建てた。</u> この王国は16世紀初頭には、メキシコ湾岸から太平洋岸までを支配下におさめるアステカ帝国に発展した。	変更なし
エクアドルやペルーなど温帯夏雨のアンデスの高地では、メキシコ高原からトウモロコシの栽培文化が伝わると定住化がすすんだ。前10世紀には美しい土器をもつチャビン文化が成立し、紀元前後には、宗教的な色彩の濃い都市文明に発展し、神殿がつくられた。	<u>アンデスでは、メソアメリカからトウモロコシの栽培文化が伝わり、定住化、リマ、アルバカの家畜化がすすみ、前2500年頃</u> から各地に神殿が建てられ、宗教的な色彩の濃い文明が発展した。	変更なし
アンデス地方では、ティアワナコ文明ののち諸王国が抗争したが、ケチュア族がしだいに勢力を増し、15世紀初頭には広大な地域を支配するインカ帝国を建設した。	アンデス地方では、 <u>ティアワナコ</u> の都市の繁栄ののち諸王国が抗争したが、 <u>ケチュア人</u> がしだいに勢力を増し、 <u>15世紀</u> には広大な地域を支配するインカ帝国を建設した。	変更なし
テオティワカンの遺跡(カラー写真の説明) 中央奥の太陽のピラミッドを中心に巨大な神殿建造物がならぶ。太陽のピラミッドは太陽神をまつる高さ65mの祭壇である。	テオティワカン遺跡(カラー写真の説明) 中央奥の太陽のピラミッドを中心に巨大な神殿建造物がならぶ。太陽のピラミッドは <u>高さ64mの基壇である。</u>	変更なし

表4 『世界史B』(東京書籍)の記述変遷 (p.111, pp.115-116)

ここで問題なのは、「導入」が興味を持たせる工夫にしかない点である。古代アンデス文明について何かしらの疑問を持たせ、それについて授業で考察させるような導入が必要であろう。

次に「指導上の留意点」として、以下の二つが示されている〔山川出版社 *ibid.* 102〕。

- ①写真や映像教材以外にも、二十進法の計算方法やインカのキープを実際の紐を用いて紹介するなど、興味を持たせる工夫をしたい。
- ②マヤ・アステカ文明とインカ文明のそれぞれの具体的特色と、両文明がヨーロッパ勢力に滅ぼされた原因を考察する。

①については、このままの記述ではインカのキープも二十進法だと誤解してしまう。二十進法はマヤ文明の記数法であり、キープは十進法であることを明記すべきである。また、二十進法やキープがどのようなものか知識を獲得する観点から書かれており、なぜ二十進法やキープで数字や量を記録したのかといった、理由や背景を考えるような手引きになっていない。

また②については、具体的特色から一歩踏み出して、その特色からそれぞれの共通点や相違点を考えるよう導くよう、授業を担当する教員に働きかける記述がほしい。そして、マヤ・アステカ文明とインカ文明がヨーロッパ勢力に滅ぼされた原因を考察するのは、教科書のこの章ではなく、コンキスタドールの記述がある大航海時代の章で学習させる内容であろう。

なお、地図に関する解説として、「メキシコ高原・アンデス山脈・ユカタン半島に加え、テノチティランやクスコなどの都市の海拔の高さといった本節に関連する南北アメリカ地誌の基礎を簡潔に押さえ、特色ある文明を、西欧中心的な歴史観・価値観にとらわれることなく理解させることが重要である」と記されており〔山川出版社 *ibid.* 102〕、地理的環境と都市の関連を意識するように導いている。

一方、教員用指導書の『研究編』には、生徒への「問い」を作るヒントがいくつか見られる。古代アンデス文明には文字がなく、鉄器も存在しなかったことから、発展途上の文明だと思われがちである。しかし、「旧世界のいわゆる四大文明との違いが多く見られる。しかし、そうした違いは『欠如』や『遅れ』としてではなくアメリカ文明の特徴としてとらえられるべきで、むしろ『石器→青銅器→鉄器』という旧世界文明の時代区分法をそのままアメリカ文明に適用しようとすることに問題がある」と記されており〔山川出版社 2017b: 86〕、古代文明を同じ視点から見のではなく、多角的に物事をとらえることを生徒に問いかける意味で、非常に重要な記述である。

用語の解説も、『授業実践編』を補足する形で『研究編』に掲載されている。ただし、キープについては「統治手段として重要な意味を持っている」と書かれており〔山川出版社 2017b: 87〕、人口や軍隊の兵力などを把握して管理に利用した説を載せて厚みを増してもいいだろう。

4.2. 『世界史 B』（東京書籍）の教員用指導書

東京書籍の教員用指導書は1冊で、「ねらい」、「学習内容の整理」、「解説と資料」、「補充資料」、「補説」、「エピソード」で構成されている。「ねらい」は授業デザインする際の目的を明確にするために利用でき、「学習内容の整理」は板書案の参考になるであろう。「ねらい」として、以下の二つがあげられている〔東京書籍 2017: 127〕。

①一つ目は、16世紀初頭までの古アメリカ世界諸文明の概要を理解することである。

②二つ目は、アメリカ大陸の文明・文化とユーラシア大陸のそれとの類似点、異質性を比較し、人類の環境対応による文化形成の意味を考えることである。

①については、どこまでを「概要」として説明するか、教員は迷うところである。「学習内容の整理」で、どの程度授業で扱うのかわかりやすく整理することが望まれる。②については、「農業がユーラシア大陸と文化的共通性を持つ発明である」ことを確認し概観することを求めている。「トウモロコシが麦や稲と同じイネ科である」こと、「ジャガイモ、サツマイモがサトイモなどの根茎利用と同類である」こと、「あく抜きや人工灌漑、埴土技術などは、ユーラシア大陸と同じ発想」だとしている。アルパカやリヤマも「西アジア以西と同じ役畜としての利用」であり、「人類がある共通な環境に適合したときに、ほぼ類似した概念をもつ文化をつくりあげることがわかる」と記している。「牽引獣、搾乳獣としてのリヤマ、毛を繊維として利用するアルパカ」と書いてあるが〔東京書籍 ibid. 127〕、厳密に言えば、アルパカは毛を得るために飼育する「用畜」であり、運搬に使われるリヤマと同じ「役畜」としているのは誤りである。

また、アメリカ大陸原産の農産物を紹介し、「文化要素の伝播には、新たな地域環境への適応技術が求められる。地域の文化は等価値であり、高い文化から低い文化へ伝播するものでないことを、古アメリカ文化の世界への貢献から理解したい」と書いている。この視点は非常に重要なものであり、むしろ「ねらい」として明記するとよいであろう。

「解説と資料」も教員が利用する用語解説として便利だが、「インカ帝国」に関しては「南北2000km」となっており、「南北4000km」に訂正すべきである〔ibid 2017: 129〕。また、山川出版社の教員用指導書の箇所でも指摘したが、キープは十進法であることを明記し、マヤ文明の二十進法との違いを明確にしたほうがよい。

4-3. 今後の教員用指導書のあり方

教員用指導書には、前述したように、導入方法、用語解説、板書例、指導上の留意点、研究情報等が書かれており、授業を担当する教員にとって授業の手引きとして利用されている。生徒に教える歴史事項や用語の知識が豊富に載っており、詳しい知識を伝えるには非常に有用な書物である。その分野に精通していなければ、「何を」材料にして「どのように」生徒の学習を導くかわからないため、利用価値が高い。その分、誤りがあつてはならず、より細かいチェックが必要なのは言うまでもない。

古代アメリカ学会で継続調査してきた教科書の記述内容〔青山他 2010, 2013〕を念頭に置き、先に見てきた教員用指導書の内容から、授業の際に押さえておきたいポイントや知識として、次のことがあげられる。

- ①古代アメリカ文明と他文明を比較し、古代文明の普遍性と多様性を理解させること。
- ②メソアメリカとアンデスの共通点と相違点を知り、互いの文明を区別すること。
- ③メソアメリカとアンデスの位置の違いを理解すること。
- ④オルメカ文明が栄えた場所は、「メキシコ高原」でなく「メキシコ湾岸」であること。
- ⑤インカ帝国の建設は、「ケチュア人」でなく「インカ」によること〔青山他 2013: 90〕。
- ⑥インカの王は「太陽の化身」ではなく「太陽の子」であること〔青山他 2010: 38〕。

また、本論で提示した教科書や教員用指導書には触れられていないが、アンデス文明において本格的に農業が発達するよりも先に神殿が建設されたことは、文明の成立過程を考えるうえで極めて重要だと筆者は考えている。例えば、東京書籍の教員用指導書には「農業の発展は、神殿を中心とした都市建設、商業網の発展、帝國的な国家建設へとつながる」と書かれているが〔東京書籍 2017: 127〕、そのような都市や国家の発展モデルにあてはまらない事例があることを生徒に提示し、文明の成立を多角的に捉える学習をうながすことが必要ではないだろうか。この事例については、次章の授業実践例で述べることにする。

筆者は、知的好奇心旺盛で「歴史秘話や裏話」に興味を持っている生徒に対し、授業プリントの裏に「雑学コーナー」を設け、教科書に書いていない話題や最新の研究情報を載せている。そうした場合、細かい知識を得るための手立てとして教員用指導書は有効である。一方、今後の授業に必要な教員用指導書は、どのような知識を与えるのかよりも、むしろ歴史事項を材料として何をどのように考えるのかを明示していなければならない。生徒が「深く学ぶ」きっかけとなるような記述を増やし、授業において生徒の学習活動をイメージしたいいくつかの教授例を示すことが望まれる。そして、どのような「問い」を発すれば、古代アメリカ文明を題材にして生徒に「深く考えさせる」ことができるのか、その方法も掲載すべきである。「用語解説」よりも生徒の「考えを引き出す手法」のような利用価値のある情報を載せることが、教員用指導書の役割であろう。新学習指導要領による授業が始まる 2022 年度に向けて、そのような有効な教員用指導書の発刊が待たれる。

5. 古代アメリカ文明に関する授業実践例

第 2 章で述べたように、本論で提示した授業に関する問題点は大きく二つある。まず、古代文明の歴史的特質を理解するためには、古代アメリカ文明の学習が不可欠である。古代アメリカ文明はユーラシアの文明から影響を受けず、独自の文明として歩んできた。他の文明と比較してそれぞれの歴史的形成について考え、多様な文明が成立・発展したことを理解するだけでなく、文明の普遍性について考えるために重要である。特に、従来考えられてきた「農耕→階級分化→神殿建設」という歴史的発展の図式を覆す事例が、アンデスにおける形成期早期の文化などに認められ、古代アメリカ文明を学習する歴史的意義があることは明白である。もう一つの大きな問題は、授業の進め方を改善することである。従来の知識伝達型ではなく、生徒に学びの場を提供するために、第 2 章で述べた「問いの設定」、「宗教を中心とした考察」、「思考力、判断力、表現力等を身に付けるための場をつくること」を意識しなければならない。特に「宗教を中心とした考察」については、古代アメリカ文明は社会が信仰と密接な関係にあり、新学習指導要領に明記されている「文化や宗教が人々の暮らしに与えた影響を考える」〔文部科学省 2018a: 76〕には、格好の学習材料になる。以上のことを念頭において実践した古代アメリカ文明の授業例を紹介し、学習成果についても検証したい。

目的	古代マヤ文明に関心を持ち、独特の文化要素を理解する。
達成目標	マヤ人が環境の不便さをどう克服したのかを理解する。
	マヤ文明のピラミッドの機能・用途を説明できる。
	マヤ文明の衰退理由を考え、それを防止する方法を言語化する。
テーマ	古代マヤ文明の特色は何か？
ゴール	マヤ文明の衰退を防ぐには？

表 5 古代メソアメリカ文明の授業フレームワーク

時間	構成	教授内容	教員の動き	生徒の動き	使用するもの等 その他
3分	準備	ペア作り	スクリーンや機器の設置 ペア作り（一人で学習したい生徒の確認）	ペア作り（座席移動）	スライド
		プリント配付	プリントを教卓に置く	プリントを持っていく	プリント
5分		授業の概要	今日のテーマとゴール提示 授業内容の確認	授業目的を意識し、流れを確認	KP法
2分	導入	アメリカ先住民	アメリカ大陸原産の栽培植物は？	ペアで考え、答えを共有	プリント
2分		古代アメリカのイメージ	古代アメリカ文明（マヤ文明）のイメージは？	ペアで考え、答えを共有 （歴史イメージの具体化）	
5分		メソアメリカ文明の概要	教科書を精読させる	教科書の精読 プリントの空欄に通語を入れ、概要を理解	教科書 プリント
3分	展開1	地図の確認 マヤ地域の環境	ユカタン半島の気候と土壌（石灰岩質）の説明 どのように水を確保した？	水を確保しにくい環境であることを理解 ペアで考え、答えを共有	スライド プリント
3分		セノーテ チュルトゥン	水を貯める手段を解説 自然環境の利用法を説明	解説をメモ	
3分					
3分	展開2	ピラミッド	エジプトとマヤのピラミッドの相違点は？	ペアで考え、答えを共有 外見・象徴性の違いに着目	スライド プリント
3分		王権の象徴 墓、神殿	マヤのピラミッドの機能を解説	解説をメモ	
3分	展開3	マヤ暦	長期暦＝循環暦を説明	自分たちの周りで循環するものを考える	スライド プリント
		2012年滅亡説	2012年滅亡の根拠を説明し、虚言を否定		
2分		二十進法	なぜ20という発想があったのか？	ペアで考え、答えを共有	
3分		マヤ文字	表語文字・表音文字など文字の種類を解説	文字解読に対し日本人の有利な面を理解	
4分	展開4	マヤ文明の衰退の原因	マヤ文明はなぜ衰退・滅亡したのか？	ペアで考え、答えを共有	プリント
4分			戦争、社会対立、宗教的破壊、環境破壊、食料不足などの可能性を指摘	いくつかの学説を理解	スライド
2分	まとめ	マヤ文明の衰退・滅亡の防止策	宿題の説明	ゴールシートの記入 （80-100字で考えを書く）	ゴールシート

表6 古代メソアメリカ文明の授業デザイン

5-1.1 時間目：メソアメリカ文明の授業（表5・表6）

筆者の授業（50分）では基本的にペアワークを行い、「主体的、対話的で深い学び」を実現するように努めている。授業の始めに「今日のテーマ」と「今日のゴール」を明示し、授業で生徒が考えるべき大きな「問い」になるよう設定する。本授業の「今日のテーマ」は「古代マヤ文明の特色は何か？」であり、それを理解するために説明を聴き、いくつかの小さな「問い」を一人もしくはペアで考えて答えを共有する。答えはすぐには解説せず、授業の終わりに「ゴールシート」（解説と短文を作るワーク）を配付して、各々がシートを読んで理解する。

「今日のゴール」は「マヤ文明の衰退を防ぐには？」で、唯一の解答は存在しない。自分の意見や感想を盛り込み、指定された字数で言語化することで文章の表現力をつけるよう設定している。また、今回のゴールは、新学習指導要領の目標・中項目(2)の「歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力」を生徒がつけるように考えた「問い」である。授業の目的・達成目標などのフレームワーク（骨組み）は、表5を参照されたい。

小さな「問い」は、対話によって理解を促進するために、毎回の授業で複数設定してある。この授業では、答えやすい「アメリカ大陸の原産の栽培植物は？」や「古代アメリカ（マヤ文明）のイメージは？」を質問して、授業の導入とした（表6）。二十進法の箇所では「なぜ20という発想があったのか？」は、説明がある程度続く時のブレイクの意味合いが強い。大きな「問い」としては、「どのように水を確保した？」と「マヤ文明はなぜ衰退・滅亡^{註2}したのか？」を用意した。前者は、新学習指導要領の内容の取扱い・中項目(1)（取扱いに当たっての配慮）・ウの「自然環境と人類の活動との相互の関係を地理的視野から触れること」を、後者は、目標・中項目(2)の「歴史の展開に関わる事象の意味や意義、特色などを、相互の関連などに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察」することを意識して設定した。また、毎回宗教と関連した話題ではないが、できるだけ「宗教を中心とした考察」につながる「問い」を発している。今回の授業では、ピラミッドの機能を考えさせることで、当時の宗教的活動や思想がどのようなものだったかを考えるようデザインした。

5-2.2 時間目：アンデス文明の授業（表7・表8）

この授業の「今日のテーマ」は「古代アンデス文明の特色は何か？」であり、メソアメリカ文明の授業と同様に、いくつかの「問い」を基本的にペアで考えて答えを共有する。「今日のゴール」は「古代アメリカ文明から学んだことは？」で、やはり唯一の正解は存在しない。この「問い」は、古代メソアメリカ文明と合わせ、何を授業で学んだのかメタ認知させる意図もある。どのような回答が出たのかについては後述する。この授業の目的・達成目標などのフレームワークは、表7を参照されたい。

目的	古代アンデス文明に関心を持ち、独特の文化要素を理解する。
達成目標	農耕が発達する以前に神殿が建設された意味を説明できる。
	インカ帝国の特徴を理解できる。
	古代アンデスにおけるミイラの意味を理解する。
テーマ	古代アンデス文明の特色は何か？
ゴール	古代アメリカ文明で学んだことは？

表7 古代アンデス文明の授業フレームワーク

時間	構成	教授内容	教員の動き	生徒の動き	使用するもの等 その他
3分	準備	ペア作り	スクリーンや機器の設置 ペア作り（一人で学習したい生徒の確認）	ペア作り（座席移動）	スライド
		プリント配付	プリントを教卓に置く	プリントを持っていく	プリント
5分		授業の概要	今日のテーマとゴール提示 授業内容の確認	授業目的を意識し、流れを確認	KP法
5分	導入	アンデスへのいざない	アンデスの民族音楽をBGMとして流す（5分程度）		CD
		アンデス文明の概要	教科書を精読させる	教科書の精読 プリントの空欄に適語を入れ、概要を理解	教科書 プリント
4分	展開1	カルル文化	先土器時代に神殿を建設したことを説明	カルル文化の特異性を理解する	スライド プリント
5分		前3000年ころに神殿を建設	カルル文化の歴史的意義は何か？	ペアで考え、答えを共有	
8分	展開2	インカ帝国	キープ、マチュピチュ、太陽信仰などを説明	インカ帝国の魅力に触れる	スライド プリント
5分	展開3	ミイラ	ミイラの風習や信仰を説明 エジプトのミイラも解説	解説をメモ	
5分			アンデスのミイラはどんな存在だったのか？	ペアで考え、答えを共有	
3分	まとめ	授業内容の復習・確認	ゴールシート（解説シート・振り返り含む）配付	解答の確認 メタ認知（振り返り）	ゴールシート
7分		古代アメリカ文明からの学び	メソアメリカ・アンデスから学んだこと（新たな発見）は？	ゴールシートの記入 （80-100字で考えを書く） 提出した者から休憩	

表8 古代アンデス文明の授業デザイン

なお、生徒に付けさせたい力はメソアメリカ文明の授業と同じだが、小さな「問い」はなくすべて大きな「問い」である。カルル文化では土器の出現以前に神殿が建設されており、従来生徒が獲得してきたイメージだと思う「農業の発達後に貧富の差が生じて階級が発生し、神殿建設につながる」という説明では矛盾が生じる。この点をしっかり考察させるため、「カルル文化の歴史的意義は何か？」という「問い」を設定した。また、新学習指導要領を踏まえた宗教を中心とした考察につなげるため、「アンデスのミイラはどんな存在だったのか？」という「問い」を用意した。

6. 授業の検証

本論で扱った2時間の授業では、筆者なりに「問い」を工夫して生徒が考察するように誘導し、唯一の正解がない質問によって多面的な考えを引き出そうとした。さらに、授業の終わりに自分の考え方や感じ方を文章にすることで表現力を伸ばすよう設定した。生徒たちが提出した「振り返りシート」と「授業評価アンケート」、

○授業での本気度 = 自分はどの段階で授業に臨んだか？ 該当する番号を○で囲もう。

④自分で考え、積極的に友人とかかわった。（一人の場合は自力で完璧に解答を作った）

③自分で考え、友人に訊かれたら見せた。（一人の場合は自分でかなり努力した）

②自分ではあまり考えず、友人のものを多く写した。（一人ではあまり学習せず）

①自分では考えず、友人のものをただ写した。（フリーライダー）

○授業でできたことを○で囲もう（複数回答可）。

①先生の説明を聴いた ②友人の説明を聴いた ③友人に説明した

④理解を深められた ⑤友人と学び合った ⑥友人に貢献した

○授業でついた力を○で囲もう（複数回答可）。

①教科書を読んで理解する力 ②内容をまとめる力 ③文章を書く力

④仲間の説明を聴く力 ⑤仲間に説明する力 ⑥仲間に理解させる力

質問事項	平均値	④	③	②	①
授業での本気度	3.4	42.9%	53.8%	3.3%	0.0%

授業でできたこと	①	②	③	④	⑤	⑥
	88.2%	74.3%	68.4%	70.3%	81.7%	84.1%
授業でついた力	①	②	③	④	⑤	⑥
	84.5%	60.3%	68.3%	72.8%	66.2%	56.9%

表 9 振り返りシートの質問事項と回答結果

そして2時間目の授業の「ゴールシート」をもとに、授業の成果を検証し、今後の課題も探りたい。

まず、達成できた授業の成果について、「振り返りシート」（表 9）で「授業での本気度」を全員（290 名）に訊いたところ、4 段階で平均値が 3.4 と一定レベル以上の自己評価であった。「授業でできたこと」では、①と②の説明を聴いたことが多かったが、⑤の友人と学び合いや⑥の友人に貢献できたことがいずれも 8 割以上と高いことが特筆される。ペアワークを生かした対話による学習姿勢が身に付いたことで、学び合いが進み、生徒たちが相互に貢献できたことがわかる。これは古代アメリカ文明を多面的に考える「問い」が効果的に作用したと考えられる。

「授業評価アンケート」（表 10）では、概ね高い評価を受けた。話し合いや意見交換は、やはりペアワークが有効だったことを示している。そして「問い」を意図的に配置したことも評価された。紙芝居プレゼンテーション法（KP 法）^{（註3）}で説明することで、生徒が板書を写す必要がなくなり〔多々良 2016a、2016b〕、「問い」に対する考察に多くの時間をかけられたことも大きい。彼ら自身の 61.2%が授業で考え方が深くなったと強く感じた（評価④）ことは特筆される。

質問事項		平均値	④	③	②	①
授業評価	授業の進む早さは適切だった。	3.3	37.4%	51.6%	9.9%	1.1%
	説明はわかりやすかった。	3.5	60.6%	26.2%	12.1%	1.1%
	授業のレベルは適切だった。	3.4	52.6%	38.5%	10.9%	0.0%
	話し合いや意見交換できた。	3.7	76.9%	18.7%	4.4%	0.0%
	ペアワークは効果的である。	3.5	62.6%	24.2%	12.1%	1.1%
	スライドは理解に役立った。	3.5	58.2%	30.8%	10.0%	0.0%
	プリントはわかりやすかった。	3.4	51.6%	37.4%	11.0%	0.0%
教員評価	声の大きさが適切だった。	3.8	82.4%	16.5%	1.1%	0.0%
	言葉が適切だった。	3.6	60.4%	35.2%	4.4%	0.0%
	問いが適切だった。	3.6	60.4%	38.5%	1.1%	0.0%
総合評価	この授業で考え方が深くなった。	3.5	61.2%	32.3%	6.5%	0.0%
	この授業は自分のためになった。	3.5	58.1%	38.7%	3.2%	0.0%
	この授業は友人のためになった。	3.3	42.9%	45.0%	9.9%	2.2%

表 10 授業評価アンケートの質問事項と回答結果

2 時間目の授業の終わりに、ゴールシート「メソアメリカ・アンデスから学んだこと（新しい発見）を 80～100 字で書きなさい」を生徒全員が提出した。その事例は、以下のとおりである。

- A ユカタン半島は水が不足するので、マヤ人がセノーテやチュルトウンを用いて効率的に水を利用した。私達が水不足の際に様々な知恵を絞って切り抜けられるかわからず、マヤ人はとても賢いと思った。
- B これまで農耕が発達して社会階層や職業が生まれ、神官による儀礼が起こったと思っていた。しかし先土器時代の神殿建設は、必ずしも進んだ農耕が必要でないことがわかり、定説をうのみにする怖さを感じた。
- C ミイラは再生を信じて作ったと思っていたが、エジプトと違ってアンデスでは共に生きる存在として大切にしていたことを知った。アンデスでは過去よりも現在を重視し、むしろ私達より家族愛が強かったのではないかな。

新学習指導要領の内容・大項目 B（諸地域の歴史的特質の形成）・中項目(1)では「問いを表現する」力を身に付けるよう指導することが掲げられている。これは「生業、身分・階級、王権、宗教、文化・思想などに関する資料を活用し、諸地域の歴史的特質に関わって抱いた興味・関心や疑問、追究してみたいことなどを見いだす学習活動」のこと〔文部科学省 2018b:285〕である。「宗教を取り上げた場合には、教師が信仰の在り方を定めた資料など複数の資料を提示し、宗教などに見られる信仰に照らして諸地域の歴史的特質を読み解く観点に関わる問いかけを行う」こと〔文部科学省 ibid.288〕が教員に求められるが、上記の文例から生徒の学びをうまく引き出せたと考えられる。また、自分たちの生活や考え方と比較して歴史事項を「自分ごと」として考え、階級発生以前から神殿建設があったことから〔関 2010〕、従来の文明形成論を批判的に見る姿勢が認められる。これ

らは「深い学び」への一歩だと言えよう。

一方、今後改善すべき課題もあげられる。「振り返りシート」（表9）で回答のあった「授業でついた力」のうち、②の内容をまとめる力（60.3%）、⑥の仲間に理解させる力（56.9%）をさらに伸ばすべきである。前者は「ゴールシート」で80～100字を書く能力をさすものであり、授業内容を読解して要約する力、そして自分の言葉で表現する力がまだ不足していることを示している。現代文などの他教科とも連携し、文章の表現力を高めていく必要がある。後者はペアワークにおいて、「カルル文化の歴史的意義」や「アンデスのミイラの存在」について説明し合う力をさすものであり、相手にうまく説明できなかったと感じていることを示している。

この二つの力は、授業でさらに繰り返して積み重ねていくことが肝要だが、その際注意しなければいけないことが、「振り返りシート」の自由記述欄「授業に対する意見・要望」に認められる。以下に六つの回答例をあげて、それぞれの課題を整理する。

- A 教科書を理解する時間や発表内容を整理する時間を、もっととってほしい。
- B 一人で考えたり作業したりする時間を、もっととってほしい。

これらの回答から、単に反復練習をするだけでなく、じっくり時間をかける必要があることがわかる。「問い」を入れたり「ペアワーク」での学び合いを入れたりすることで、学習活動に時間がかかる分、進度を気にして時間不足に陥っているという指摘である。授業で扱う内容をもう少し絞って、彼らにとって優先すべき自分の考えを整理する時間を確保してあげなければいけない。

- C ペアワークだと、緊張して話せないことがある。
- D アイスブレイクを毎回やってほしい。

友人とコミュニケーションすることが苦手な生徒は、学習内容を相手に説明することよりも、その時間を共有すること自体に抵抗を感じている可能性がある。ペアワークが苦手な生徒には、あらかじめ自己申告によってペアワークをせずに一人で集中する学習スタイルを認めているが、よりコミュニケーションをしやすい環境づくりが必要だとわかった。「アイスブレイク」とは、ペアワークの前に相互に話しやすくリラックスする雰囲気を作るための小さな仕掛けである。時間がないから省略するのではなく、短時間でも丁寧に授業に組み入れていくファシリテーションが大切である。

- E 簡単なまとめ授業をしてほしい（先生が説明をしたうえで、ペアなどで学び合って理解したい）。
- F プリントの解答は、生徒同士の答え合わせだけでは不安なので、先生の解答を示してほしい。

これらは、授業で学習した内容を解説したり、「ゴールシート」を提出した後、生徒たちの解答を共有して学び合う時間を確保したりすることが必要なことを示している。進度が遅れないように「解答例」を配付しただけで終わることがあり、大きな課題であろう[多々良 2019]。

7. 教科書、教員用指導書、そして教員の役割

以上、本論で報告したように、教員が綿密な授業準備を行い、適切な「問い」を用意すれば、古代アメリカ文明を扱った授業を「深い学び」の空間にできることがわかった。今後の新科目「世界史探究」に向けて、高校生が古代アメリカ文明の授業でどのように深く学ぶことができるのだろうか。

古代アメリカ学会では、これまで教科書記述の誤りを指摘し、それを修正するよう教科書会社に提案してきた。第3章で述べた通り、その活動は一定の効果を上げ成功したと言えよう。誤った情報を生徒に伝えることは、決してあってはならない。だが教科書には容量の限界があり、ヨーロッパやアジアを学習の中心にした新学習指導要領を見ても、新たな教科書に古代アメリカ文明の記述を多く取り入れることは難しいだろう。したがって、多くの知識を教科書に取り入れるという「何を学ぶか」の視点だけでなく、「どのように学ぶか」を主眼とし、どのような歴史的材料を高校生に提供できるかを考える必要がある。このことは、私達古代アメリカ専門家が勘違いしてはいけない点である。

もちろん、教科書の役割は正確な知識を与えることだが、豊富な知識を与えるだけではなく、歴史を現代の自分たちの生活、いわゆる「自分ごと」に置き換えて考察する手がかりとなることが教科書の役割だと筆者は考えている。知識を身につけるだけではなく、「深く学ぶ」きっかけを与えることが重要であると、新学習指導要領も繰り返し言及している。例えば、最も占有率が高い『詳説世界史 改訂版』（山川出版社）のマヤ文明の記述は4行しかなく、専門家にとってはあまりにも少なすぎる情報である。この記述から歴史事象の背景・原因・結果・影響などを考えさせるには、「繁栄期とは何がどのように栄えた時期なのか」、「ピラミッド状の建築物が造られた背景や原因は何か」などを問えばよい。しかし、実際の教科書の記述には原因や影響を考えさせる要素は見当たらない。生徒に因果関係や背景を考察させるのであれば、宗教的な要素や文明の衰退について載せるべきだろう。一方、より多くの知識や答えを教科書に載せることは、かえって主体的学習を阻害する恐れも出てくる。いかに中心軸を設定し、考察する材料となる情報を載せるかが重要になってくる。細かい情報は欄外かコラムとして載せれば十分だ、と筆者は考えている。

新学習指導要領でうたわれている「思考力・判断力・表現力」をつけるために、そして知識偏重の傾向から脱却する授業を実践するために、大きな役割を果たすのが教員用指導書である。現在出版されている教員用指導書には、第4章でも触れたように、重要語句の解説や授業をする際の指導上の留意点やアイデアなどが書いてある。しかし、情報化社会においてわからない用語や細かい情報は、webなどを用いてすぐに調べることができる。今後必要とされる情報は、豊富な知識を提供するよりも、実際に授業に必要な「深い学び」に導くための問いの設定である。したがって、授業デザインに関わる情報を載せ、高校生が歴史を通じて主体的に課題を解決していくような手助けとなるように教員をサポートすることが、教員用指導書のこれからの役割だと思う。

同時に、今後の教員の役割を考えることも重要である。古代文明がそれぞれ個別に成立・発展し、それが影響し合うか否かにかかわらず、共通性と異質性を持つことを学ぶのが、歴史学習の重要性である。その情報を提供するだけでなく、深く学ぶことができるかは教員の授業デザイン力にかかっている。すぐに答えを与えず、有効な「問い」を投げかけること、できれば唯一の正解がない「問い」を設定し、今後の解答がない社会に生きていく力を生徒につけさせることが大切である。換言すれば、知識を与えたり説明したりすることに、従来ほど重点を置かず、生徒が主体的に学習するモチベーションを高めることと、教室が情報を共有して学習しやすい空間になるように環境を整えることが、教員の仕事だと考えられる。教員は、生徒自身が気づき、質問し合い、教える機会を多く創り出すファシリテーターであることを意識する必要がある。思考力、判断力、表現力を高める

ためには、従来の知識を伝える授業の在り方も変えていくべきだろう。

筆者が取り入れているペアワークは、生徒自身が自由に多く発言することや、自分と他者の考えを比較しながら理解を深めることができる方法である。新学習指導要領で核となっている「思考力、判断力、表現力等を身に付けるための場をつくること」を十分意識し、「問い」に対する答えをペアで協働して解決する姿勢を身に付けるよう指導している。自分の思考が友人のそれと同じなのか対話によって確認し、もし違うのであれば他の意見を聞いて再度判断する学びの場を提供するのである。表現力については、前述したように自分の考えを文章化することで着実に培われている。

8. おわりに

本論では、古代アメリカ文明の授業が「深い学びの場」を提供できたかどうかを筆者が検証し、一定の成果が上がったことを報告した。さらに高次の歴史学習の場にするためには、「振り返りシート」と「授業評価アンケート」を連動させ、どの部分（問い）で自分たちが以前と違った考えを持ち、有意義な学びを体験できたかを高校生本人たちにわかるよう工夫する必要がある。正確な知識や関心を持つような話題を提供するだけでなく、「問い」の質を高める努力を教員が続けていかなければならない。本論では言及しなかったが、2018年に仙台市博物館で開かれた「古代アンデス文明展」の見学を軸にして高校で事前と事後の授業を行い、「事前授業—見学会—事後授業」という一本の線にして、より深い学びを目指した授業を実践した。このような博物館の特別展と授業を結び付ける方法も有効である^(註4)。博物館を活用した授業実践例は他の機会に譲ることにするが、独自の成立・発展を成し遂げてきた古代アメリカ文明こそ、古代文明の多様性と普遍性を理解する歴史の題材にふさわしいことを今後も発信し続けていきたい。

註

- (註1) 教育WGでは、新必修科目「歴史総合」の授業案を提示することが効果的だとしているが〔渡部他2018: 107〕、この科目は日本の歴史と関連のある近現代史を中心としているため、本論では比較的古代アメリカ文明の記述が豊富だと推測される新選択科目「世界史探究」の授業を考察対象にした。
- (註2) 正確にはマヤ文明は「滅亡」したわけではなく、マヤ文明滅亡のテーマも重要な問いにはなる。だが、深入りすると授業時間内で消化できない。主要な都市が放棄されたことは事実であるため、高校生にわかりやすい表現で「衰退・滅亡」という語を用いた。
- (註3) KP法は、授業の流れや要点をあらかじめ紙に書いておき、説明しながら黒板に貼っていく方法である。説明時間が短縮でき、貼られた紙で授業の流れが理解しやすい利点がある。
- (註4) 事前授業では、古代アンデス文明の概要を説明して生徒が関心を抱くようにし、事後授業では、見学会で興味を持ったり疑問を持ったりしたことをグループごとに整理し、KP法で発表・相互評価を行うことで、より深い学びになるように設定した。

参考文献

青山和夫・多々良穰・坂井正人・井上幸孝・吉田栄人

2010 「先コロンブス期アメリカ大陸史に関わる世界史教科書問題」 『古代アメリカ』 13: 31-40。

青山和夫・坂井正人・井上幸孝・井関睦美・長谷川悦夫・嘉幡茂・松本雄一

- 2013 「先コロンブス期アメリカ大陸史に関する世界史教科書の記述はどう変わったのか—新学習指導要領に沿って改訂された高等学校世界史教科書の検証—」 『古代アメリカ』 16 : 85-100。

時事通信社

- 2019 「19年度高校教科書採択状況—文科省まとめ（上）」 『内外教育』 6726 : 12-13。

関雄二

- 2010 「序章 古代アンデス文明とは何か」 『古代アンデス 神殿から始まる文明』 朝日新聞出版。

多々良穰

- 2016a 「考える時間を創り出すKP法による世界史授業」 『アクティブラーニングに導くKP法実践』（川嶋直・皆川雅樹編）pp.134-39、みくに出版。
- 2016b 「授業実践報告2」 古代アメリカ学会第21回研究大会、シンポジウム「古代アメリカに関する高校教育を考える」発表資料（2016.12.4発表、於：国立民族学博物館）。
- 2017 「古代アメリカ文明史の高校授業改善—教科書記述の検討から教科研究へ—」 『古代アメリカ学会会報』 41 : 5-7。
- 2018 「主体的・対話的で深い学びに向けた世界史授業の実践」 『歴史と地理（世界史の研究）』 719(257) : 16-27、山川出版社。
- 2019 「問いをもとにした古代アンデスの授業」 令和元年度宮城県高等学校社会科教育研究会第38回ワークショップ発表資料（2019.8.6発表、於：東北歴史博物館）。

東京書籍

- 2017 『世界史B 指導書』

文部科学省

- 2009 『高等学校学習指導要領』 平成21年3月告示。
- 2018a 『高等学校学習指導要領』 平成30年3月告示。
- 2018b 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 平成30年7月告示。

山川出版社

- 2017a 『詳説世界史 教授資料 授業実践編』
- 2017b 『詳説世界史 教授資料 研究編』

渡部森哉・井上幸孝・多々良穰・市木尚利・森下壽典・石田春彦・鶴見英成

- 2018 「高校教育を対象とした古代アメリカ学会の普及活動」 『古代アメリカ』 21 : 103-118。

原稿受領日 2019年5月15日

原稿採択決定日 2019年8月31日